



## Q&A ねこの健康とお医者さん

ご質問より...

動物ボランティアには、ねこの適切な飼い方のほか、病気の診断も相談されます。

不幸なねこを保護している方に限らず、ねこを譲りうけた飼い主さんや、ペットのねこの飼い主さんなどさまざまの方々からです。

人間の体調不良と違い、問診のできない具合の悪いねこの健康について、間接的な情報だけからの判断は難しいことです。

多くのねこのそれぞれの健康について、たくさん巡り会い、経験豊かなボランティアでも、学識的な専門知識を磨く獣医師ではありません。

獣医さんですら、治療する動物を飼ってみて経験をし、来院する同じ動物に直接接触して、更に獣医療の臨床経験を積まないと、プロとしての治療ができない、といわれるほどです。

来院しない飼い主さんからの口伝えの情報では、具体的な診断を控える獣医師さんの例も知らされています。

動物ボランティアに症状を伝えても、一般的なアドバイスはできますが、その動物に最も合う適切な治療は困難です。

しかし、ねこの健康をまもるためのフードや、毎日の生活環境を整えること、生態や習性・生理のほか感染症の知識を持つこと、適切な飼い方のほか、飼い主さんのさまざまな事情に合った方法などは、獣医さん以外からの情報を得ることもできます。

また、排便や挙動、外観などから、果たして健康なのか、何かの不調なのかを知ることができますが、病気を治す方法は、専門の医療知識や技術を持つ獣医さんの分野と考えられます。

獣医さんは、動物の健康を維持し又は回復させるために通院する顧客や、動物の健康に責任をもたなければいけない顧客と動物との関係などについても、動物への治療と同様に社会的な責任を負わされています。

ねこに何かの体調不良の思われる際には、社会貢献に理解のある獣医師さんと巡り会う

方法と同じで、通院する前に電話などでお問い合わせすることもできます。(獣医師と巡り会う、は項目別途) 人間の医療と同様にインフォームドコンセントの考えや、医療過誤、医療事故を防ぐ対策などを求める風潮が高まっていますので、開業獣医さんに限らず、医師の事業者組織なども率先して改革をすすめているようです。

ねこの疾病治療や健康管理を目的に、信頼できる獣医さんと巡り会うための目安も考えられています。

ねこの数十種類にも及ぶ感染症や、ペット動物の生まれながらの疾病障害などは、人間がなんらかの目的を持って、それぞれの近い種を人為的に繁殖させるなどの結果、それまでになかった病気や傷害、生理異常などを発生させたとされています。

獣医師ならではの専門的な知識を持つ動物病院では、飼い主の通院させるねこへの治療技術のほか、感染症や新たな疾病の発生を防ぐための飼い主指導も欠かせなくなっています。

通院するねこや動物が、例え今は健康でも、人の作為から意図的に繁殖させられたり、そのほかの不適切な行為を強いられることにより、さまざまな弊害を後世にもたらす恐れをあわせ持っています。

これらの実害を防ぐ専門的な知識や技術を獣医師は兼ね備えながら、獣医療に携ることになります。(ねこの感染症や、近交劣化現象=近い種同士の人為的繁殖、などについては、項目別途)

通院顧客と治療をうける動物と、動物病院との信頼関係を築く目安のひとつに、従来はタブー視されがちだったことからの見直しもあげられます。

獣医師の社会貢献の一環として、今までは知られることの少なかった身近な現実を、獣医療に取り込みながら経営される病院と巡り会うことも不可能ではありません。





## Q&A 近交劣化・雑種強勢

ご質問より... 野良ねこが感染症の発生元か？について...

文献などによりますと.....、世界中の動物園のすべての動物についての個体血統登録情報交換システムを作る動きが、公的な施設から始まっているようです。

自然環境と生物多様性の意識が高まるに従い、専門的な見識を持つ動物園では、野生動物を捕らえて展示した旧来のシステムを変えています。

世界中の動物園ネットワーク間の登録情報を利用しながら各国が連携し、必要の認められる際に限り、園内繁殖を行う方向に進んでいるようです。

園内繁殖に係わる人々の知恵の下で、近交劣化現象や異常出産、そのほかの弊害などを防ぐ目的の、個体血統登録と考えられます。

近交劣化（又は、近交退化）を簡単に言い換えると.....、親子兄妹など、系統（血統）が強く密接なとき、人の意図的な繁殖から健康な個体が生まれにくいということです。

その逆を雑種強勢ともいい、動物の自然な習性、生理、生態、本能などに由来する出産です。

近い系統同士で繁殖することにより、生理・生態などに劣化現象が現れるとともに、疾病障害や感染症などが発生し易くなります。

獣医学術書によると.....、ねこの数十種類ともいわれる感染症などのうち、従来より世界中のノラネコと呼ばれるねこに見られた、危険性の少ないといわれた感染症は一種類だけだったとされています。

その後海外ではねこの繁殖施設、つまりキャタリーが増え続ける時代になりました。

キャタリーではねこの系統の特定する種類に、長い期間をかけて、人為的な繁殖生産を繰り返すといわれます。

現在までに確認されている数十種類にのぼる感染症などのほとんどが、キャタリーからの臨床発症例として、獣医学の文献などに報告されています。

近交劣化現象の事例です。

感染症ウイルスなども、その対策用医薬品が開発されるに従い、薬品などに対してより抵抗力が強く、免疫性の高いウイルス種にすむことも知られています。

ねこの感染症に限らず、外見から判断のつきにくい、生まれながらの生体障害や生理異常などを、ペット動物が合わせ持って出産する、危険性の高い時代にすすんでいます。

今まで、場合によってはタブー視されがちだったことがらや、ビジネス社会の風潮に流されがちだったことがらを見つめ直す気運も出始めているようです。

---

ある地域で、TNRプログラムに基づいて行われた地域ねこプランの数年間の実績から、飼い主のいない外のねこの数種類の感染症を調べた結果を聞かされました。

通院する飼いねこと、外のねこが感染症を持つ割り合いに、大きな差の認められなかったこと。

言い伝えられている予想に反して、外のねこの感染率の低い事例が認められたこと、などです。

数年間の統計ですから、飼い主のいないねこが外で代々生まれ育ったのかどうかなど、雑種強勢についての長期間の調査結果は不明です。

---

